

◆ 年頭にあたってのご挨拶 ◆

理事長 飯塚 尚彦

「2023年新年によせて」

2023年も無事に明けました。皆様におかれましてはいかがお過ごしでしょうか。

当協会の第72期は昨年12月末日をもって無事半期を折返しました。これも皆様のご理解とご協力の賜物と感謝申し上げます。

今期は役員改選がありますので、現執行体制による2年間の活動を総括する意味でも、下半期の活動を一層充実させ、応分の成果をもって来期に繋げたいと思います。

2022年における当協会の主な事業活動は、千葉と札幌での「自然科学書フェア」の開催、公式ホームページの大幅なリニューアル、定期的な会報発行の継続、会員向けオンライン研修会の複数回開催などを挙げるができます。また、JCOPY、SARTRASなど対外的な活動にも注力しました。同時に、来るべき当協会創立80周年にむけて特定資産の用途を定めた「80周年記念事業資金取扱要領」の策定、商法改正にともなう「電子帳簿保存法事務規程」など規定類の整備も行いました。詳細については会員報告会や会報の紙面に譲りますが、わが国がまだCOVID-19の制約を受ける中であって、多岐にわたる活動が実施できた背景には、副理事長はじめ役員各位のご尽力、委員会に所属する委員お一人お一人の活躍があることは言うまでもありません。心より御礼申し上げます。



さて、2022年を振り返ると、やはり年間を通してCOVID-19の影響を受けた1年だったと思います。年明け早々には新規陽性者数が急増し、これが第6波と報じられました。その後一旦落ち着いたかに見えましたが、8月には第7波、11月には第8波が報じられ、収束することなく越年しました。日常的なマスク着用姿に変化はなく、テレワークやリモート授業などは日々の生活により一層浸透したように見受けられます。そして、ガソリン価格の高騰、電力不足、食糧問題、対ドル円安、物価上昇、7月には元首相が遊説中に射殺されるという事件も勃発。また、自殺者の増加、特に若年層での増加は、将来に希望を見出せない若者のおかれた現状を反映していると識者は言います。社会を閉塞感が覆う中で、包容力というか、寛容さを失った現れかもしれません。“自己責任”という言葉の背景には、共同体や相互扶助の否定、そして分断。社会から包容力が失われてゆくように思えてなりません。

資産形成に対する考えにも変化が見られるようになりました。例えば、比較的若くて収入に余裕がある層が不動産に縛られるリスクを嫌って自らは賃貸物件に住み、投機用の不動産を所有するというケースを耳にします。これは終身雇用という日本の企業文化の終焉がその背景にあるのではないかと思います。また、対ドルが円安に振れてからは、海外の農園などに働きに出る若者

もいると聞きます。時給換算すると国内で働くより効率的であり、海外で働いた方が資産形成できるということだそうです。

一方、海外に目を転じると、2月に始まったロシアによるウクライナへの軍事侵攻は、解決の糸口を見出せないまま越年しました。そして、この軍事侵攻を契機に領土、エネルギー、原材料、食糧等の調達リスクや難民政策……などなど、様々な問題が表面化し、各国の利害関係が複雑に絡みあっている様子があぶりだされました。

また、仮想通貨決済企業の破綻や、安定成長を続けていたGAFAの株価下落も話題になりました。GAFAの一角であるFacebookはMETAに社名変更しメタバースに活路を見出そうとし、Twitter社は経営者が交代しその経営判断も取締役会からオーナー個人に移行しました。ネット時代の優良企業も存続のため改革を迫られているのだと思います。

ところで、マキアヴェリは『君主論』の中で、「ある道を進んで繁栄を味わった人は、どうしてもその道から離れる気にならない」（池田康 訳、中公eブックス、位置No.2686/3361）と述べています。そして、「(決まった手しか打てない人は)時勢が変わっても新たな手が打てず破滅する」という趣旨の文章が続きます。

なぜ、決まった手しか打てないのでしょうか。それはその手が過去の成功体験に裏付けられているからだと思います。そして、成功体験が多ければ多いほど、強烈であればあるほど、その手は捨てがたくなるのでしょうか。しかし、時代が過ぎればその手が通用しなくなるのも必然です。

好むと好まざるとにかかわらず、世界の一員である我が国も改革の中にあると思います。その中であって自然科学書協会はどうかあるべきでしょうか。

当協会の事業は、公益法人制度改革を経て「実施事業（公益事業）」と「その他の事業（共益事業）」に区分され、活動にも一般社団法人としての制約があります。しかしそれらが自然科学書協会の発展を阻害するものではありません。これからも維持継続すべきことと改革改善すべきことを見極め、将来を見据えて目標を定め、具体策を立案して実行する。勿論それはグレートリセットとかゼロベースといった過去を否定することからの出発ではなく、過去の経験を踏まえた上で、未来に向け小さな脱皮を繰り返すことだと思います。

千々和泰明は『戦争はいかに終結したか』（中公新書 2652）の中で、20世紀における戦争の歴史を出口戦略という切り口で分析し、その本質は「現在の犠牲」と「将来の危険」のシーソーの中で「紛争状態の根本的解決」と「妥協的平和」の間を揺れ動くことだと指摘しました。そして紛争状態の解決策に「根本的解決」から「妥協的平和」まで振幅がある以上、選択した出口戦略が新たな紛争の火種になる可能性もあると指摘します。改革もしかり。大きな改革のあとには大きな反動があり、安定を求めたつもりがかえって不安定な状態を生みだすきっかけになるかもしれません。過去から学ぶこと、即ち温故知新。先達の知恵から学びつつ、今年も着実に歩みを進めたいと思います。そして、その歩みが応分の成果を生み、それが少しでも皆様のお役に立つことを願いつつ、年頭のご挨拶とさせていただきます。